

難波西鶴と

海の道

【84】

森田 雅也

前回の西鶴の『武道伝来記』(『真享4(1687)年刊』巻四の二)「誰捨子の仕合」は、九州島原の話でしたが、敷討ちが行われた場所は琵琶湖の志賀・唐崎の辺りでした。

こんなに移動距離があれば、まさに「江戸の敷を長崎で討つ」ということわざのようですね。ところが、その意味は「意外な場所でもまたは筋違いな事で、昔の恨みの仕返しをする」(『日本国語大辞典』)だそうです。

ただ、このことわざは西鶴の時代より、もっと後に

成立したようです(前掲書の補注によれば文政年間1818〜30年とする)。

西鶴の頃なら、ここまで連載してきたように、「海の道」がありますから、「琵琶湖・淀川・大坂・瀬戸内海・九州航路」を利用している商人は多かったはずですが、敷がそのようなルートを頼って、琵琶湖周辺に潜伏したのも分かります。その情報が島原まで漏れてしまったことも、さして非現実的な話とは言えないでしょう。

もっとも、この話がすべて事実かと言えば、他の西鶴作品がそうであるように、定かではありません。

ところで、『武道伝来記』には、他にも九州の話があります。巻七の三「新田原藤太」は薩摩、鹿児島の話です。

鹿児島城の一室で、4人の武士が泊まり番を勤めることになりました。浮橋太左衛門と巻田新九郎の2人は宵から夜中まで休んで、それから夜明けまで勤める順番でした。2人の休んでいる間、寝ずの番をしていたのは、沖浪大助と中辻久四郎でした。2人は弁当を開き、お茶を飲み、寂しい夜を過ごしていましたが、春の長雨が降り出し、カエルの声がかましくなると、眠気覚ましになっていました。

そんな時、天井で音がして、何か黒い物が落ちてきたので、大助は脇差で抜き打ちに切り払いました。行燈の灯火でよく見ると、一尺四、五寸(約45センチ)の百足が二つに切られていま

薩摩舞台の「新田原藤太」

した。久四郎は「なんという早業だ。まるで、その昔に(大津の)瀬田の橋で百足退治した田原藤太の剛のようだ」と大助をもてはやしました。大助も「あっぱれ、この男はまれにみる居合の名人でござる」と調子に乗り、笑いとはしました。

その後、大助が私用で町を通りかかった時、南江主善という成り上がりの重役に出会ったところ、「これ藤太殿、どこへお越した」と声をかけられました。大助は「私の名前は大助だ。藤太などという名乗りは致さぬ」と言い返しますが、「先日の百足退治の話は、家中のうち、誰知らぬ者はいないほどの評判だ。なっ田原藤太殿とからかって、そのまま行ってしまいませぬ。これが大騒動の元になります。次回にて。

(関西学院大学文学部文学言語学科教授)

「武道伝来記」の九州話